

---

# 魔法少年放浪記

陰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少年放浪記

### 【Nコード】

N9317M

### 【作者名】

陰

### 【あらすじ】

魔力を持つ少年レイトは王の命令により兄バルスと共に首都コーラルへ旅立った。

## 第1話 「旅立ち」

バル大陸南東部、ヴァナル王国にファル二村がある。

ある満月による男の子が生まれた。側にいた占い師は言った。「この子供、魔力を感じる。」

名はレイト。

それから15年後、レイトはファル二村にある農場から果物を抱えて家へ歩いていった。

「なんで、僕がこんなことしなければいけないんだろう。」レイトはぼやいた。

「兄貴がこんな時いれば一人でこんなことしなくていいのに。」

レイトの兄、バルスはヴァナル王国の炎獄の騎士団、小隊の隊長に16歳で抜擢される程の剣士で体もレイトよりも大きく、昔は二人で家のでつたいをしていた。

「おかえり。」レイトの母、ミイが玄関で出迎えた。

「ただいま。リビングに置いておくね。」

「ありがとう。そういえば、バルスが帰ってくるって手紙が届いたわ。」

「兄貴が?」

「ええ。一週間でファル二へ着く予定だった。あなたに用にあるみたいよ。」

「僕に?何の用?」

「そこまでは書いてなかったわ。なんででしょうね。」

「まあ、いいや。兄貴に直接聞こう。」

そして、一週間後バルス一行がファル二へ到着した。

「ただいま。」

「おかえり。」

バルスは漆黒の鎧を身に纏って、細身の剣を腰に下げていた。

「いきなりだが、レイトにコーラルに来てもらう。」

「コーラルって、首都の？なんで？」

「王の命令だ。先に言うが、おまえを連れてこいと言われてないから細かいことはわからない。」

「母さん。」

「行つてらしゃい。バルス、レイトをおねがい。」

「ああ。行くぞ、レイト」

「うん。行つてきます。」

そして、レイトは王のいるコーラルへ旅立った。

## 第2話 「覚醒の兆し」 (前書き)

初めての戦闘です。

## 第2話 「覚醒の兆し」

ファルニを旅立ってすぐ問題が出来た。

「兄貴、僕の馬はどうするの？兄貴はその茶色の馬がいるけど、僕はいい。」

「ボイルだ。コーラルまでは一週間だから俺の後ろに乗ればいい。」

「わかった。そういえば、一人なの？小隊の隊長なんだからみんなとは一緒じゃないの？」

「誇り高き炎獄の騎士団だぞ。ただか、隊長の弟一人を家から連れてくるのに何人も必要じゃない。」

「ただか。けど道中になにかに襲われるというのはないの？」

「他国や国内でももつと外れたところでないと襲われるのはない。百万が一、何かに襲われても俺がいる。」

「。」

そんなことでファルニからコーラルへの道のりの半分に差し掛かったところで草むらで物音がした。

「レイト。気をつける。」

「何？」

草むらの陰から山賊らしき人が二人出てきた。

「おい！おまえらが誰だか知らねえが、荷物を置いていつてもらうぜ！」

「その黒いあんちゃん！よさそうなモン持ってるじゃねえか！特にその剣！」

「なあ、レイト。こいつらは馬鹿か？この剣を見ていて、俺とやろうって言うてるぞ。」

「あはは。」

「ごちゃごちゃうるせーな！いくぞ！」

山賊A、Bがレイト、バルスに戦いを仕掛けてきた！

バルスはAに剣を向けて突っ込んでいった。

その切っ先はAの喉を突き刺した。その間に、Bがレイピアをレイトに向けていた。

「悪いな、坊主。」

「レイト！」

「じゃあな」

レイトにはその切っ先が自分に向ってくるのをゆっくり見ている。

『僕はここで死ぬのかな？』

『嫌だ！こんなところで死にたくない』

そのとき、レイトの左目に剣が交わる形が浮かび上がった。

「怒りのイフリート、炎を飛ばせ！」

その時、Bに向かって炎が走っていった。

「うわぁー！！」

Bは悲鳴を上げながら、飛んでいった。

バルスはレイトの元に走り寄ってきた。

「レイト、怪我はないか？」

「うん。大丈夫」

「今のは何だ？」

「知らない。勝手に口から言葉が出た。」

「まあいい。コーラルへ行けば何かわかるだろう。」

こうして、一行はコーラルへ再び進みだした。

## 第2話 「覚醒の兆し」(後書き)

次はいよいよコーラルです。



### 第3話 「首都 コーラル」(前書き)

いよいよ、コーラルです。

### 第3話 「首都 コーラル」

「コーラル正門前」

一行はようやく、コーラル正門までやってきていた。

「やっと、コーラルだね。コーラルってどんな町なの？」

実はレイトはこの質問をこれまで数十回、バルスへ訊いていた。

「着いてからのお楽しみだ。」

しかし、バルスはバルスで数十回同じことを言っていた。

「では、入るぞ。」

そう言っただけでバルスは門の横にいる、ヴァナール近衛兵の男に話かけていた。

『近衛兵の鎧って黄色主体なんだな。兄貴に派手だとは聞いていたけど、ここまでとは。』

レイトは近衛兵の男を眺めながら思った。

「炎獄の騎士団、第2小隊長バルスだ。王の命令で一度故郷のフアルニへ戻っていた。後ろにいるのは俺の弟のレイトだ。入るぞ。」

「はっ！長旅お疲れ様です。王のご命令の話は聞き及んでおります。どうぞ。」

「御苦労。おいレイト、いくぞ。」

「え、うん。」

こうして、二人はコーラルへ入った。

「コーラル市街」

「すごい！」

門をくぐりぬけて、レイトの目に飛び込んできたのは賑やかな風景だった。

「コーラルはヴァナールの市場を抱える、城下町だ。市場にはいろんなものがヴァナール各地から送られてくる。たいていはここで手に入る。そして、何といても、目を引くのがあのコーラル城。」

あそこにハール王がいらつしやる。」

「すごい。コーラル城って予想よりも大きいや。」

「ああ。ヴァナールが誇る城だ。さあ、王の元へ行くとするか。」

「え？ 買い物しないの？ せっかくなのに。」

「コーラルに着いたのだから、まず任務の報告を王にするのは当然だろう。買い物は後でもできる。」

「うん。そうだね。じゃあ、城へ行こう。」

### 第3話 「首都 コーラル」(後書き)

コーラルにやっと着きました。

次回は王に会います。どんな王なんだろう？

## 第4話 「王との出会い、そして話」(前書き)

いよいよ王様との謁見です。

#### 第4話 「王との出会い、そして話」

「コーラル城 謁見の間前」

「すごいね。」

「そうだろ。もう謁見の間に着いたな。」

二人はコーラル城に入っただけに兵士に謁見の間に連れていかれた。

「この扉、派手だね。」

「ああ。」

レイトは謁見の間の扉を見ながらつぶやいた。

「さあ、入るぞ。」

「コーラル城 謁見の間」

二人は、謁見の間へ足を踏み入れた。

「遠路はるばる御苦労だった。バルス、済まなかった。」

「い、いえ。何とありがたきお言葉。」

ヴァナルの王、ハール王が話かけてきた。

「レイト、理由もわからず、一週間もかけてコーラルにまで来てもらってすまなかった。」

「とんでもないです。で、なんで僕のことを呼んだのですか？」

「レイト！王に対して、なんて態度を！すみません。田舎者のため、このような態度しかとることが」

「よいよい。訳のわからないやつに、いきなり改まれ、と言われてもな。」

「は、はあ。」

王の顔がいきなり引き締まった。

「さあ、早速だが本題に入ろうか。」

「はい。お願いします。なんで、僕は呼ばれたのでしょうか。」

「レイト、君は魔法を使えるらしいじゃないか。」

「王、なぜそれを。」

「兄貴、何のはなし？」

「ああ。前に山賊に襲われたときがあっただろう。あの時、おまえがやったあれだ。」

「そんなことがあったのか。大丈夫だったか。」

「あ、はい。大丈夫です。」

「あの、僕が山賊の一人にやられそうになったときに魔法を使ったみたいなんですよ。」

「そうか。おい、バルス。お前がいながら、そんなことになっていたのか。」

バルスは驚いたような顔をして

「はい、すみません。」

「そして、その魔力を使えるレイトに頼みがある。」  
レイトも、びつくりしたような顔をした。

「頼み？」

「ああ。ヴァナール、各地をまわってもらいたい。各地に行つて魔石というものを集めてもらいたい。」

「魔石？」

「ああ。緑色の石だ。魔石には魔力増強の力がある。」

「はい。その石を集めればいいですね。」

「後、もう一つ。魔導隊を結成してもらいたい。」

「えっ？」

「魔導隊を結成してもらいたい。コーラル内部にも、能力の高い魔導師はいる。しかし魔導隊を結成する程ではない。そこで、各地の魔導師を集めてほしい。手紙を出せばいいと思うかもしれないが、コーラルの魔導師から話を聞いた方がいいと思う。」

「王、いいですか。」

バルスが久し振りに発言をした。

「何だ？」

「なぜ、いきなり魔導隊を結成しようと考えたのですか？」

「ああ。当然の質問だな。実は隣国、ジュミール王国が戦争を我が

国に仕掛けようとしているという、話がきている。そこで、近衛兵と炎獄の騎士団だけでは、と思つてな。もちろん、お前たちを信用していない訳ではないが、ジュミール王国はバール大陸一の魔導隊を抱えている。その上とは言わないが、戦えるぐらいはほしい。」

「なるほど。」

バルスは納得したような顔をしている。

「けど、何で僕なんですか。」

「それは、お前の成長を考えてだ。詳しいことはもっと先にな。」

「はあ。わかりました。行きます。」

「ありがとう。バルスは騎士団として、コーラルにいてもらいたいから旅に出す訳にはいかない。護衛は出発の時に発表だ。」

「いつ、出発ですか？」

「ああ。急いでもらいたいが、コーラルをゆっくり見てもらいたい。一週間後に出発にしよう。それまでに準備をしてくれ。必要なものはバルスに聞け。」

「はい。」

「はい。」

「では、また一週間後に会おう。」

そして二人は謁見の間を出た。

レイトは心の中を整理しきれていなかった。



#### 第4話 「王との出会い、そして話」(後書き)

次は準備の話です。

なかなか、バルスが発言をできなかった。

次も難しいかな。

## 第5話 「図書館の魔導書」(前書き)

更新が遅くなりすみませんでした。今回は、図書館の話です。

## 第5話 「図書館の魔導書」

「コーラル城個室」

翌日、レイトは与えられた、コーラル城の部屋で、一週間をどう使おうか考えていた。

「えっと、食料と服と武器かな。後は…」

そこで、ドアを叩く音がした。

「どうぞ。」入ってきたのはバルスだった。

「よう。元気にやってるか？」

「いや。まだ、何も出来てないよ。どうしよう。」

「王からの伝言だ。『城の地下にある、図書館に魔導書がある。司書は旅のことを知ってるから、何でも気軽に聞くと良い。』とのことだ。おそらく、そこで魔法についての知識をつけろってことだろう。」

「わかった。いまから行ってくる。兄貴は？」

「俺は騎士団の任があるから、一人で行ってこい。道は分かるか？」

「うん、部屋にくる前に階段を見たから、大丈夫。」

そして、レイトは部屋を出、図書館へ向かった。

「コーラル城図書館」

コーラル城の地下にある、図書館は大規模で国中の本があるのではないかと言われている。図書館は一般の人々が利用することができるが、奥に「開かずの部屋」と呼ばれている部屋がある。その中にレイトが探している魔導書がある。

レイトは図書館に着いた途端、男に話しかけられた。

「君がレイト君かい？」

レイトは、驚いた顔で答えた。

「あ、はい。」

『この人の気配を感じなかった。』

レイトが答えると、男は笑いながら、言った。

「はは、そうか。君がレイト君か。俺は、カイ。ここで司書をやらせてもらっている。話は聞いているよ。魔導書を見たいんだよね。こっちへおいで。」

そう言つてカイはレイトを奥へ案内した。

『悪い人じゃなさそうだな。そりやそうか。王様公認だもんな。』

そして、二人は開かずの部屋の扉を開けた。

「さあ、好きな魔導書を選んで読むがいい。」

「あの、僕、どれを読めばいいか、わからないんですけど。」

「ああ。そうか。君は炎の攻撃魔法を使つたらしいな。しかも、上位の。」

「何で知つてるんですか？上位だつていうのは今、初めて聞いたつていうのに。」

「王のご命令で君はコーラルへ来た。それを警備兄一人に思ううか？君達に黙つて普段、潜伏をしているやつを同行させていたんだ。まあ、彼なら気付いていたと思うけど。気付けない、君はやっぱり、まだまだだな。んで、炎の魔導書はこれだ。」

カイはそう言つて、ある一冊の本を取った。それには、「炎属性魔法 攻撃篇」と書いてあつた。

「まずは、これを読め。何かあつたら呼べ。そこら辺にいるから。」  
「言い、カイはどこかへ行つた。」

『けど、足音はするから近くにはいるんだろうな。』

レイトは読書を初めた。

魔法の種類や形式、有効範囲などが書いてある魔導書。

「大事なものは、経験と訓練。それで、感覚を覚えることだ。普通はそうやって魔法つてのは発動できるようになる。お前、みたいにいきなり発動できるのは稀なんだ。しかも、上位魔法だなんてたどり着けない人もいるくらいだ。やろうとするんじゃない、知識を得る

つもりで読め。」

カイは本棚の向かい側から話した。

「はい。なんでカイさんは、そんなに魔法について詳しいんですか？」

「長年、魔導書の管理を任されてんだ。嫌でも覚えるってもんだ。」

カイは笑いながら言った。

「そうですね。」

「さあ、読め。」

「はい。」

そう言ってレイトは一時間くらい、魔導書を読んでいた。一段落ついたところでレイトは魔導書をしまった。

「ありがとうございます。今日はもう帰ります。」

「ああ。よく長く魔導書に没頭してたな。やっぱり、魔法の才能があるのかもな。」

「ありがとうございます。じゃあ。」

そう言っつて、レイトは図書館を後にした。

## 第5話 「図書館の魔導書」(後書き)

次も、準備です。

旅立ちまで行けるかわかりません。レイト君に新たな出会いがあるのかな？

## 第6話 剣士との出会い（前書き）

また、更新まで時間がかかってしまってますみません。  
学校行事などがあって…と言いつつ訳をします（笑）  
今回は、剣の話です。

## 第6話 剣士との出会い

「コーラル 城下町」

二日目昼過ぎ、レイトは道に迷っていた。

「兄貴の言ってた武器商人の店って、どこだろう。」  
話は一時間くらい前にさかのぼる。

「レイト、今日は武器を揃える。忘れてたじゃ済まないからな。早いうちに買っておいた方が良い。」

「うん、わかった。けど、どこで売ってるの?」

「城下町の端に武器商人のおっさんが店を構えてる。分かりやすいから迷うことはないと思うぞ。」

「…そう言われてきたんだけど、どこが分かりやすいんだよ!全然、わからないんだけど。」

レイトは愚痴りながら武器商人の店を探した。

店を探して10分くらい経った時にレイトの耳に女の子の声が飛び込んできた。

「ちよつと、何すんのよ!」

「ああ!?ぶつかってきたのはそっちだろうが!」

金色の短い髪と蒼い目が特徴的な女の子と体つきのいい男が言い争っていた。

レイトはその周りを囲む野次馬達の中に加わった。

野次馬の中からは

「やっちまえ!」

「負けるな!」

といった野次が飛んでいる。

「おい。やるつてのか!」

「そちらこそ。男なら態度をはっきりしなさいよ!」

男の脅しのような声にも怖じけずに女の子の方も言い返す。



「ふん！なら、こちらから行かせてもらっ。」

男が一気に二人の距離を詰めた。

「はっ！」

女の子の方もバックステップで距離を取る。しかし、男のリーチの分、拳が女の子の顔面に直撃する。

「もらった！」

かのように見えた。が、女の子は姿勢を低くし、パンチを避けて、そのまま男の腹に拳を入れた。

「ぐふっ。」

男は膝から崩れ落ちた。

「ったく。なんなのよ。そっちからぶつかってきたくせに。」

「くそ。覚えてろよ！」

男はそう言っ腹を抑えながら走っていった。

「ちよつと。何見てんのよ！」

女の子はレイトを見て言った。

「いや、凄いな。と思って。」

「言いたいことはそれで終わり？」

女の子は怪しいものを見るようにレイトを見た。

「うん。他には、どうやったらそんなに綺麗な動きができるんだろ  
う、くらいかな」

「女なのには思わないの？」

女の子は不安そうに言った。

「うん。別に関係ないんじゃないの？」

レイトは答えた。

「そうね。そういえばあなたは何をしに出てきたの？」

「そうだ！武器商人の店を探してたんだ。忘れてた」

「あなたもあそこに用があるの？なら案内してあげるわよ。」

「本当？助かるよ。僕の名前はレイト。君は？」

女の子は驚いたように答えた。

「わたしはポアラ。それじゃあ行きましょう。」

武器商人の店

ポアラに案内されて1分。あっという間に店についた。

「もう、着いた。」

レイトはガツカリしたように呟いた。

ポアラは驚いたように「もしかして、迷ってたの？」と訊いた。

「もしかなくても、そうだよ。」

「まあ、いいわ。着いたんだし。おじさん！いる？」

ポアラは店の中に声をかけた。

「なんだ？ポアラちゃんか。出来てるよ。」店の中から白い髭を蓄えた老人が出てきた。その手の中には身の丈程もある剣があつた。

柄には滑り止めの黒い革が張られ、刃は両刃で輝いていた。

その剣を当然のように受け取りながら、ポアラは言った。

「ありがとう。毎回済まないわね。」

「それってポアラの剣？大きい。振れるの？僕には無理だな。」

「まあ、振れるわよ。レイトもここに用があるなら、剣を使うことくらいできるんでしょ？」

「それは…。実は、剣なんて触ったことすらないんだ。」

「え？じゃあ、なんでここに用があるのよ？まさか、そんな剣に縁のない人が偉そうに剣を買おうとしているの？」

ポアラが怒りながら、レイトに訊いた。

その時、武器商人は口を開いた。

「もしかして、レイト君かい？」

「そうですけど、なんで僕の名前を知ってるんですか？」

レイトは驚きながら言った。

「君の話は上から聞いているよ。ちょっと待っててね。君のために――振り用意してあるから。」

武器商人はそう言うのと店の中に入った。  
その様子を見ながら、ポアラは言った。

「上って王様よね？なんで、王様の話にあなたが出てくるのよ？」  
ポアラは怪訝な顔で聞いた。

「えっと……」

レイトは言い淀んだ。

それにポアラは強い口調で言った。

「何？人に言えないことなの！？まさか、王様からの密命なんて言わないわよね。」

（密命に入るのかな？戦争に関係するからそうなのかな）

レイトは悩んだ。

その時、武器商人が後ろから話に入ってきた。

「もう、いいじゃないか。ポアラちゃん。それぐらいで。いずれ知ると思うよ。」

「わかったわよ。それでレイトの剣はどうなの？」

ポアラはしぶしぶうなずいた。

武器商人は答えた。

「ああ。微調整は使用者が必要だから、完成とはいかないが、大まかな所は大丈夫だ。」

「ありがとうございます。それで微調整っていうのは？」

レイトは喜びながら尋ねた。

「ああ。それは中で。おいで。」

武器商人は手招きした。

「はい。」

レイトは返事をし、店の中に入ろうとした。

その時、ポアラが言った。

「待ってる間、買い物しに行ってくるわ。どれぐらい、時間がかかるかはわかるから、それくらいになったら戻ってくるわ。あなたの剣を見てみたいし、私がいないと宿まで、帰れないと思うから。」

「わかった。ありがとうございます。ポアラ。」

レイトは礼を言った。

「んじゃ。頑張ってたね。」

ポアラは町へ行った。

「それでは僕らも行こうか。」

武器商人は言った。

そして、レイトは店の中に入った。

武器商人の店 内部

「広い！」

レイトの口から出たのはその一言だった。

「なんで、あんなに見た目は小さいのに、中はこんなに広いんですか？」

レイトは武器商人に尋ねた。

武器商人は答えた。

「それは、空間操作の魔法を使ってるからさ。」

レイトは驚いて、言った。

「じゃあ、おじさんも魔法使いつてことですか？」

「魔法使いつて言っても、下位魔法しか使えないけどね。」

武器商人は苦笑いしながら言った。

「いや。魔法をこんな風に使うのはすごいと思います。僕なんて、攻撃しか、したことがないから。」

レイトは落ち込みながら言った。

「話は聞いたよ。けれど、上位魔法をその歳で使えるのはすごいと思うよ。魔法だって、種類と使い方を組み合わせないと、魔法の本当の力は発揮されない。」

レイトは感心してうなずいた。

「はい。それで、剣の微調整っていうのは？」

レイトは尋ねた。

「ああ。この板に利き腕を置いて。」

そう言つて、武器商人は模様の書かれた板を差し出した。

「それも、魔法ですか？」

「まあね。さあ。」

レイトは板に右腕を置いた。

「こうですか？」

そうすると、板は赤く光つて、すぐに元の板に戻った。

「これで良いんですか？」

レイトは不安そうに尋ねた。

それに武器商人は笑つて答えた。

「ああ。ありがとう。これで、君の剣は完成したよ。」

レイトは驚いて言つた。

「これだけで？」

「僕は空間操作だけでなく、鍛冶技術の魔法も使えるからな。まあ、これはこのような使い方しかできないが。」

武器商人は答えた。

それにレイトは感心して言つた。

「なるほど。」

「それでは、外で待っていてくれ。ここからは企業秘密なもんでね。」

「

はい。」

そうして、レイトは店の外に出た。

（武器商人の店前）

レイトが店から出ると、すでにポアラがいた。

「終わった？」

「うん。あれでいいのかな？」

レイトは不安そうに呟いた。

「大丈夫。あなたがなんのことを言ってるのか、大体予想がつくけど、板に腕を置いただけでいいのかって、初めは思っわよね。けど、あれで大丈夫だから。」

ポアラは言った。

「うん。」

「レイトは剣についてどれくらい知ってるの？」

ポアラは訊いた。

「全然。教えてほしいな。」

「まったく。例えば、種類。剣には大きく分けて、二種類あるの。一つは普通の剣。何もおまけがついてないの。私の剣もこれに入る。もう一つは魔法剣。剣自体に魔法がついているものだけど。これはこれだけでいくつ種類がある。基本的に普通の剣と同じなんだけど、追加効果があったり、杖と剣が一緒になったものだったり。あと、レベルの高い魔法使いになれば、普通の剣に魔法を使って魔法剣として一時的に使えらしいけど。まあ、私たちには関係ないわね。」

ポアラが説明した。

「ありがとう。剣にもいろんな種類があるんだね。」

二人が話していると、店から武器商人が出てきた。

「レイト君、出来たよ。これが君の剣だ。」

そう言って武器商人が剣を差し出した。

レイトが鞘から抜き取ると、黒い細身の剣が出てきた。柄には青い石がはめられていた。

「すごい。」

レイトは言った。

「これがレイトの剣？すごい。私のより、綺麗ね。」

ポアラはうらやましそうに言った。

「ポアラちゃんのは、実用性を求めろって言ったからね。レイト君のは魔法剣だから、柄には魔石がはめられてる。普通のは緑なんだけど、珍しい青い魔石を使った。これはサービスだね。名前は碧魔

刀っていうのはどうだろう？」

武器商人は自慢気に言った。

「碧魔刀。ありがとうございます。剣って、名前があるんですね。」

「剣には一振りずつに命が宿ってると思ってるからね。ちなみに、碧魔刀は細身の剣だから、刀って名前が付いてるんだ。」

「へえ。なるほど。そういえば、ポアラの大きい剣は何て名前が付いてるんだい？」

レイトは訊いた。

「私のは、黒影剣。そこそこ、この名前は気に入ってるのよ。」

ポアラは言った。

「今日はありがとうございました。」

レイトは武器商人に礼を言った。

「いやいや。それより、頑張ってたな。その剣が君の身を守り、またこの地で会えることを願ってるよ。」

武器商人は笑いながら言った。

「それじゃあ、行こうか。」

ポアラが言った。

「ポアラちゃんも、気をつけてな。」

武器商人は言った。

「わかってるわよ。」

ポアラも言った。

こうして、レイトは碧魔刀を手に入れた。

「レイトはこの宿に泊まってるの？どうせ、道に迷うんだから一緒に行ってあげるわよ。」

ポアラは笑いながら言った。

「いや。いいよ。道はわかるから。」

「遠慮しないの。ほら、どこ？」

「あ、急用を思い出した！じゃあね。今日は、ありがとう！」

レイトは言って、走っていった。

「え？行っちゃった…。逃げたわね。今度、会ったら文句の一つく

らい言つてやんなきゃ。」

ポアラは呟いた。

「城に止めてもらつてゐるなんて、ポアラが知つたらたぶん事情を聞いてくるだろうからな。」

そうして、レイトはコーラル城に向かった。



## 第6話 剣士との出会い（後書き）

次回は、旅立ちになる予定です。  
近いうちに投稿できるように努力します。

## 第7話   メンバー集合   そして旅立ち（前書き）

また、更新が遅れてしまつてすみません。  
やっと、旅立ちます。

## 第7話    メンバー集合    そして旅立ち

レイトは一週間、魔導書の読解や食料調達をし、旅立ちの準備をした。

〈コーラル城    謁見の間〉

そして、旅立ちの日。レイトは謁見の間にいた。

「王様、僕の準備は整いました」

レイトはハール王に言った。

「そうか。ところで、準備ができたと言うが馬は用意できたのか？」

「あ、忘れてた……」

レイトは落ち込んで言った。

それに王は笑って言った。

「冗談だ。こちらが用意したから安心しろ」「はい。ありがとうございます」

レイトは言った。

「さて、護衛だが、密使だから大勢付ける訳にはいかない。そこで、能力の高いなおかつ成長を期待できるやつらを護衛に付ける」

王は言った。

「ありがとうございます」

レイトは言った。

「それで、その護衛は？」

「お前ら、入れ」

王は扉の方に向かって言った。

その声のすぐ後、扉は開き、二人入って来た。

一人は長身で黒髪の青年。

青年は黒いローブを身に着けていた。

「カイさん！」

「よっ！」

もう一人は金髪の大剣を背負い、青い鎧を着ている少女。

「ポアラ！？」

「なんで、私には疑問形？」

「いや、意外だったから」

レイトは言った。

「意外って何よ！？カイさんは納得して私は納得出来ないの？」

ポアラは怒りながら言った。

「あれ？カイさんとポアラは面識があったの？」

「ああ。たまに図書館で会って話す程度だけどな」

カイが答えた。

「三人とも仲が良くて良かった」

王は言った。

「ねえ、ポアラ。王様の前で剣って持っていていいの？」

「ああ。大丈夫。王様の許しを頂いてるから」

ポアラは言った。

「さて、顔見せも済んだところで、外へ行こうか」

王は言った。

「「はい」」」

三人は答えた。

「コーラル城 正門」

四人は正門にやってきた。

そこには、馬が三頭柱に繋がれていた。

「これが、僕達の馬ですか？すごい。ありがとうございます」

レイトは礼を言った。「その、黒毛は駿馬でジオ。大柄な栗毛は安定感が売りのピース。そして、小柄な栗毛はトゥールだ。それぞれ、特徴があるからよく考えて選べ」

王が言った。

「トゥルーの特徴はなんですか？」

訊いたのはカイ。

「若い。そして、判断がいい。」

王は答えた。

「ジオは、ポアラだろう。剣士だから細かい立ち回りがあるだろうからな。トゥルーはレイトか。近距離戦闘と遠距離戦闘のどちらもこなすだろう。俺は魔法主流になるから安定感があるピースってことでいいだろうか？」

年長のカイが言った。

「問題ないと思うわ。」

ポアラが言った。

「うん。決まりました」

レイトは王に向かって言った。

「よし。それでは、早速で悪いが出発してもらいたい。各自、忘れ物はないか？」

「「大丈夫です」」

三人は返事をした。

「カイ。ちよつと、いいか？」

王はカイを呼んだ。

「はい。なんですか？」

そして、二人は小声で会話を始めた。

「なんの話をしてるのかしら。私達に内緒だなんて」

「確かに。気になるね」

話を二人がしているとカイが二人のところに戻ってきた。

「悪いな。図書館の話と連絡の件についての確認だ。気にしないでくれ」

「そうならいいけど」

レイトは言った。

「さあ、行きましょう」

ポアラが言った。

「それでは行ってきます」

そうして三人はコーラルを旅立った。

## 第7話    メンバー集合    そして旅立ち（後書き）

次回は旅の道中の話になると思います。

町に着けると良いな。

こんどこそ、早めに更新できるように努力します。

有言実行は苦手ですが…

## 第8話 眠りの森（前書き）

お久しぶりです。

それでは行きましょう



## 第8話 眠りの森

一行はコーラルをでて東へ進んでいた。

「魔石の情報を集めるんだっただら町に行くべきだ。そこで、東のベイデンに行こうと思う。どうだろうか？」

コーラルを出る時、カイは二人に聞いた。

「賛成だけど……ベイデンに行くには森を通らなければいけないんじゃないかった？」

ポアラが言った。

「ああ。ベイデンの森だ。別名、眠りの森って言う。なぜ、その名がついたのかは知らんが……」

カイが言った。

「ともかく、そのベイデンの森に行こう」

レイトはまとめた。

そうして、一行はベイデンの森に着いた。

くベイデンの森く

「着いたけど……何よこの森。暗いにも程があるでしょ」

そう、ポアラが言った通り、ベイデンの森は暗く、3mも離れればお互いの顔が見えないくらいだ。

「これじゃ、何かに襲われたら対処が難しいな」

カイが言う。

「けど、それは相手もそうなんじゃない？」

レイトの質問にカイが答える。

「まあ、そこらの山賊ならそうだが、ちゃんとした訓練を受けている兵士なら話は別だろう。ここにいる、獣も同様だ」

「見つかったら大変だ」

「まあ、いないことを祈りながら進みましょう」

そうして、三人はベイデンの森を進み始めた。

「ところで、眠りの森ってどうして付けられたんだろう。眠りとは関係のない、ただの少し暗い森だよね」

レイトは歩きながら言った。

今、三人はポアラ、レイト、カイの順に離れ過ぎないように進んでいた。

前のポアラが答える。

「そうね。暗過ぎて、眠くなるって意味じゃないだろうし…」

「まあ、歩いていれば分かるだろう。わからんままが一番だがな」

そうして、しばらく進んでいた時、ポアラが叫んだ。

「きゃあー!!」

「どうした!?」

「そこに、人間の死体が…」

ポアラの目の前には人間の死体があった。

「死体ぐらいで剣士が驚いてはいけないだろう」

カイが言った。

「悪かったわね!いきなりだったから驚いただけよ」

そんな二人を尻目にレイトは死体を見ながら言った。

「この人、死に至りそうな傷がないよ。剣の跡とか。魔法で殺られたのかな?」

「いや、魔法じゃない。もちろん、断定は出来ないが…。魔法も種類が多いからな。それよりは、手がないのが気になるな」

「多分、手首を前に落とされていたんじゃない?」

ポアラが言った。

「けど、それにしては傷口が新しいけどな」

カイが言った。

「まあ、ここで話をしててもしょうがないんじゃない?」

「そうだね。埋めてあげよう」

そうして、三人は死体を埋め、手を合わせた。

その時、草むらからカサコソという物音がした。

「何だ！」

三人はそれぞれの戦闘姿勢をとった。

草むらから、一人の男が大きな荷台を引っ張りながら出てきた。

「誰だ？」

レイトは尋ねた。

「名乗る名もない商人ですよ。あなた達は旅人の方々ですね。何か買って行きませんか？」

商人は答えた。

「出発をしたばかりなのでね。それより、死体を見たか？」

カイは尋ねた。

「ちよつと、何を訊いてるのよ？こんなに怪しい人に……」

ポアラはカイに小さな声で訊いた。

「商人なら情報だつて持つてるだろうと思ってな。それに、あつち

には俺らが何者なにかは知られてない。大丈夫だ」

「死体ならさつき見ましたよ。あれは、スリービーの仕業でしょう」

「スリービー？」

レイトは訊いた。

「蜂みたいな連中です。やつらの毒には麻酔が含まれていて人間でも、群れで襲われたら倒れます。それで寝たところに女王蜂が来て卵を体内に産み、中から肉を食べて育った、幼虫は食い破り出ていく。それがあの死体の原因です」

商人が解説した。

「じゃあ、手首がなかったのは、食い破られた跡ってこと？」

レイトが訊いた。

「ご明察。素晴らしい」

「じゃあ、そいつらはまだこの近くにいてること？」

ポアラが訊いた。

「その可能性が高いだろうな」

「それじゃあ、あつしは行きます。また会うことがあったらどうか

「ご鼻屑に」

そう言つて商人は去つて行つた。

「俺らもベイデンに向けて進もう」

そうして、三人は奥へと進んで行つた。

しばらく進んでいると突然、羽音がし始めた。

その音は次第に大きくなつていった。

「嫌な予感しか、しないのは俺だけか？」

カイが言つた。

「いや、残念ながら」

「僕達もだ」

三人の背後にはスリービーの群れが迫つていた。

「逃げるか？」

カイが二人に訊いた。

「いや、早い！馬でも無理だ」

「しょうがない。戦闘をするしかないか」

カイが言つた。

「けど、私の剣はこういうのはダメよ！」

ポアラは黒影剣を眺めながら言つた。

「しょうがない、俺の魔法でどうにかする」

そう言つてカイは魔法詠唱に入つた。

「咲くは紅の蓮。求めるは火炎。地獄の火柱！」

詠唱が終わると同時にスリービーの群れに向けて火柱が登つた。

「すごい！」

レイトは言つた。

スリービー達は次々と落ちていった。

「今のうちよ！」

ポアラの声で三人は逃げ出した。

「すごいね。さっきの魔法」

レイトは言つた。

「お前の魔法とは、似ているようで全然違う。何が違ってた言うのは難しいが」

カイが言った。

「僕も、あんなすごい魔法を使えたら良いのに……」

「けど、レイトだって上位魔法を唱えられるんでしょう」

ポアラが言った。

「おい、そんなこと言ってる間に第二波が来たぞ！」

「え？嘘！？」

ポアラは叫んだ。

「今度は、僕が――！」

レイトは詠唱に入った。

「怒りの闘神、イフリート！火炎を飛ばせ！」

スリービーの群れに火の玉が飛んで行った。

スリービーの群れはバラバラになり、逃げて行った。

「すごいじゃない！」

ポアラは喜んだ。

「うん。なかなかだな」

カイも頷いた。

「よし、今のうちに森を抜けちゃおう」

そう言っただけでレイトは先に歩いて行った。

その後ろ姿を見ながら、カイは呟いた。

「あの、年齢であの魔法かよ……」

それに、ポアラも返した。

「そうね、予想以上だったわ。レイトの存在がジュミールに知られないと良いけど……」

「そうだな。あっちにとつては厄介な存在だろうな。おまけに魔導隊のことまでバレたら、ヴァナルまで危なくなる」

「そうね、あくまでも内密に、ね」

ポアラが言った。

「二人共、行くよ！」

前の方からレイトが言った。

「ああ。今、行く！」

カイが言った。

「行こう。国の宝が呼んでるわ」

ポアラは笑いながら言った。

「おいおい。宝はまだ早いだろ」

カイも笑いながら言ってレイトの元へ走って行った。

ポアラもそれについて行った。

それを見ている、人影が二人。

「これは、上に報告だな」

「それでは、我が行つてこよう」

「それでは、我が調査を続けよう」

そうして、一人は消え、もう一人はレイト達を追った。

「やっと、抜けた！」レイトはベイデンの森を抜け、叫んだ。

「よし、無事にベイデンの森を抜けられたな。ベイデンはすぐそこだ」

「ご飯、食べたい！」

ポアラは言った。

「行こう、ベイデンへ！」

三人はベイデンへ進みだした。

## 第8話 眠りの森（後書き）

今度は早く投稿します

## 第9話    ハイデン（前書き）

ハイデン到着です



## 第9話    ベイデン

「ベイデン 市街地」

レイト一行は、ベイデンにいた。

「ベイデンは見ての通り、風車が特徴の田舎町だ。けど、情報収集には問題ないだろう」

カイが言った。

「のどかな町ね。一日でベイデンの森を抜けることができてよかったわ。スリービーの群れと野宿だなんて、ごめんだもの」

ポアラが笑いながら言った。

「よし、しばらくは自由行動にしよう」

レイトは提案した。

「いい考えだと思うが賛成は出来ないな。何かあった時、三人の方が何かと楽だろう」

カイが言った。

「それじゃ、三人で行動するにして、まずどうする？」

「ポアラが飯を食いたいって言っていたからまず食事にするか。もう日が暮れる」

辺りを見渡してみると、太陽が沈むところだった。

「食いしん坊みたいに言わないで」

ポアラが悲しげに言った。

三人は食事をした後、早速、情報収集にかかろうとした。

「夜の情報収集は酒場が一番だ。お前らは先に宿に行っている」

カイは言った。

「わかったわ。気をつけてね」

「先に行ってるね」

二人は言って、宿へ行った。

「さあ、俺も行くか」

カイは酒場へ歩きだした。

くベイデン 酒場く

カイは二人と別れた後、酒場にいた。

「なあ、ここで緑色の石についての話はないか？」

カイは、そんなに酔ってなさそうな男に訊いた。

「緑色の石？知らねえな」

男は言った。

「そうか。すまない」

カイは言った。

カイは、近くで飲んでいた女に話しかけられた。

「あんた、それなら北のコロネルで発見されたって話を聞いたわよ。その話を聞いたのも昨日だし。行けばあるかもね」

「本当か？助かる。ありがとう」

「いや。困った時はお互い様だから」

「本当にありがとう」

カイは礼を言つて、酒場を出た。

「さて、宿へ行くか。あいつらが何かしでかしてないといいが……」  
そう言つて、カイは宿へ向かった。

くベイデン 宿く

レイトとポアラは宿でカイが帰ってくるまで話すことにした。

「私達の役目は、魔石の回収と魔導隊の編成よね？メインでやらなきゃいけないのは魔導隊の方で、そのためには魔法使いの人を探さないといけない。カイさんは、魔石の方をやってるだろうから私達でも魔法使いの人を探さない？」

ポアラは言った。

「良い意見だけど、問題があると思うな。見つけたとしても、王様もおっしゃってたけど、魔法使いがいないと魔導隊には誘えない。カイさんがいないと……」

レイトは言った。

「けど、情報を得るとこまでは二人で出来るんじゃない？」

「そうだね。それじゃ、まず宿のおばちゃんに訊いてみよう」

そうして、二人は二階の部屋から降りて、女将のところへ行った。

「あら、どうしたんだい？」

女将は言った。

「あの、こちらで魔法使いの人を知ませんか？噂でもいいんでポアラは訊いた。」

「魔法使い？そうねえ。田舎だから、そんなに人は来ないんだけど。ちよつと待ってね」

そう言つて女将は後ろへ下がっていった。

「そうよね。そう簡単に見つからないわよね」

「まだ、始めたばかりじゃないか」

レイトは言った。

女将は帰ってきて言った。

「いたよ、いた。その人はうちには来てないんだけど、この町に來たつて」

「詳しく教えてください」

レイトは言った。

「魔法使いかどうかはわからないんだけど、ただ者じゃない雰囲気を持った男の人がいたらしいわ。眼帯をしていて、腰には細身の剣を差していたつて。そうそう、そんな感じの」

女将はレイトの腰に差してある碧魔剣を指さしながら言った。

「その人がどつちへ行つたか分かります？」

ポアラが尋ねた。

「北の方へ行つたらしいわ。それより、あなた達は何者なの？魔法

使いなんて探して」

女将は怪しげに言った。

（来た！どうしよう）

レイトは思った。

「魔法使いを追っている輩がいるらしくて、保護をしると、上から命令が下ったのです」

いきなり声がし、後ろを振り返ってみると、カイがいた。

「あら、そうなの。魔法使いさんも大変ね。あなた達も気をつけてね」

女将は言った。

「ありがとうございました。おやすみなさい」

レイトは言った。

三人は部屋に戻った。

「カイさん、助かりました」

ポアラは言った。

「ああ。お前らがすぐに答ええないから……。考えてなかったのか？」

「全然。カイさんの方はどうだったんですか？」

レイトは言った。

「全然って……。こっちは収穫があつたぞ。魔石らしき物が北のコロネルで見つかったっていう話を聞いた。そっちはどうだ？」

「奇遇ね。こっちは北の方へ魔法使いかもしれない人が行つたっていう話を聞いたわ。確証はないけど、追ってみる価値はあると思うんだけど」

「そっちも北か。よし、北のコロネルへ行くとするか」

カイが言った。

「カイさん。さっきの魔法使いを追っているやつがいるっていうのは、本当ですか？」

レイトは尋ねた。

「嘘だ。そんな話は今のところはない。咄嗟に思い付いただけだ」

「そうなんだ。今は、ってことは、この先はあるかもしれないって

こと？」

レイトは言った。

「さあ」

「それじゃ、明日には北のコロネルへ出発ってことで。おやすみなさい」

ポアラはまとめて、自分の部屋に帰って行った。

「俺らも寝るとするか」

カイは言った。

「はい。おやすみなさい」

レイトは言って寝た。

「ああ。おやすみ」

そう言ってカイも寝た。

そして、次の日。三人は朝食を摂り、ベイデンの出口にいた。

「忘れ物はないか？」

カイは二人に言った。

「二人共大丈夫よ」

ポアラは答えた。

「よし。それじゃ、出発するか」

こうして、三人はコロネルへ出発した。

その姿を見ている男が二人。

「あいつらはコロネルへ行くらしいな。上へ報告だ」

「了解」

そう言って、一人は何かを呟き、消えた。

第9話    ベイデン（後書き）

次は男を追って北へ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9317m/>

---

魔法少年放浪記

2011年10月7日18時07分発行